

井上 司朗 著

シリーズ ■ 昭和裏面史 ■ 2

証言 戦時 文壇史

情報局文芸課
長のつぶやき

平野 謙
中島 健蔵
長与 善郎

徳富 蘇峰
横山 大観
大仏 次郎
吉川 英治

昭和文学史を塗り変える静かなる告発!

戦後、文化人たちが自己の戦争責任の免罪符をかちとるために、軍、情報局関係への悪罵を競い放つ姿を、戦後を余生と観じ、追放解除後も官途につかず、日陰に身をおいて静かに見守っていた著者を動かしたものは何か。

人間の科学社

定価1200円

井上司朗

証言・戦時文壇史

情報局文芸課長のつぶやき

■ シリーズ ■ 昭和裏面史 ■ 2 ■ 人間の科学社 ■

著者略歴 いのうえ・しろ（筆名：逗子八郎）

1903年 東京生まれ

1928年 東京大学政治科卒業，安田銀行を経て

1939年 内閣情報部情報官，情報局第五部第三課長，第二部文芸課長，大蔵省監督官を歴任

1948年 後楽園スタジアム取締役役に転じ，ニッポン放送の創立に参画，総務局長，監査役を経て現在同放送社賛

主 著 『主知的短歌論』『一高寮歌史観』紀行集『日本の自然美』歌集『八十氏川』『雲烟』など

証言・戦時文壇史

1395-00060-6159

1984年6月25日 第1版第1刷発行

© S. Inoue 1984

定価 1200 円

著 者 井 上 司 朗

発 行 者 本 郷 馨

印 刷 島田精版印刷株式会社

製 本 (有)清水製本所

発 行 所 有限 人間の科学社

〒101 東京都千代田区神田小川町3-10-3

振替東京8-175508 Tel 03(813)5271

営業部 〒112 東京都文京区小石川4-1-2

落丁、乱丁本はお取り替えいたします。

検印廃止

証言・戦時文壇史

——情報局文芸課長のつぶやき——

証言・戦時文壇史 目次

忘恩の徒・平野謙を弔う 一

中島健蔵君の挑戦に応ず——この恥なき戦争協力者に与う 五三

長与善郎氏の偽善者の側面を衝く 七六

終戦激動の日の徳富蘇峰先生と横山大観画伯 一〇九

大仏次郎先輩を偲ぶ——ある求道者の死 一三六

吉川英治氏の思い出 一七八

あとがき 二二九

忘恩の徒・平野謙を弔う

一、まえがき——表題について——

「忘恩の徒」——いやな言葉である。

生来のお人好しと世話好きで、困った人が応援を求めにくると、断り切れない。つい余計なお荷物を背負いこんでしまう。若い人の就職など、本人にみどころがあればムキになって肩入れする傾きがある。

そのルーツの一つは、私が昭和三年東大法科を出て、志望の朝日新聞の外に安田銀行（現富士銀行）の採用試験をうけた時（当時は大変な不況で、東大採用四名の処へ八百人も押しかけた）味の素の社長だった鈴木三郎助氏（初代）が、孫の孝君（現宝製薬社長）の浦和高校への受験勉強で私に大変お世話になったからと、私のためわざわざ安田本部に車を乗りつけ、時の副頭取結城豊太郎氏に、私のことをじかに申し入れてくれたあとで（今考えると、これは大変な好意だった）、「就職は人生の一大事だからね」とやさしくいわれた言葉が、今だに身に沁みているからである。（三郎助氏の令弟忠治氏の優秀な令息達——有名な鈴木八兄弟との、特に竹雄、義雄、治雄、秀雄の諸兄との親交は、この

時に胚胎する。)

然し私は信条として、他人にいいことをしてあげれば、私自身それだけで充分酬われているので、それ以上、その人にいつまでも有り難く思つて貰おうとか、礼をいつて貰おうなどは、考えてもいない。人の世話ができたということだけで、既に充分ありがたく、神仏のお蔭と感謝し、その外のことなど水の流れのように、意識の外に去つてゆく。

七十六歳(この稿執筆当時)まで生きたので、富士銀行、ニッポン放送、後樂園、大蔵省、大成建設、丸紅、その他いくつかの銀行、会社への就職に骨折つてあげた人は、今まで八、九十人を超すだろう。(しかし、はばかりながら今の人のように、それで礼金をもらつたことなどただの一度もない。)なかには、その職場を定年でやめ、第二の会社に専務、社長で出向しているものもある。今だに盆暮のことづけを欠かさぬ人もあるが、全く音沙汰ない人もいる。音沙汰ないのは、無事で元氣の証拠と、ひとりよろこんでいる。

そういう人達を、忘恩の徒だなどと思ったこともない。だが、ただ一人例外がある。

昭和五十二年、新潮社から老大な十三巻の全集を出した文芸評論家平野謙である。

実をいえば、私は「例外」としてでも忘恩の徒などとはいいたくない。然し私は平野謙全集第十三巻の情報局に関する文章を読み、これはひどいなと思つた。彼は、戦前戦中の私の公私にわたる数々の心尽しを悉く無にしたばかりでなく(無にしたらけなら、私はむしろひそかに彼の健在を祝福しているだろう)、戦後、彼は自己保身のため、私に対し、サムライとして実に恥すべき虚構と、人間誹謗とをほしいままにしている。

然し、その虚構と誹謗が、私一個人にかかわるだけならまだよい。恩を仇で返す男も、広い世間には珍らしくないからだ。だが、彼の場合は、それが昭和文学史の幾頁かを誤らせていることと、こんな卑劣な品性を深くひそめた人間が、高次な人格を最も強く要請されるという文芸評論の仕事に、果して正しく堪え得たのかと、今文壇の一部でも問われはじめていることが非常に重大なのだ。嫌な標題だが、私は後世のため、このドラスティックな題下に、彼に関する一つの証言を提出する。彼に好意をもち、ないし崇拜する人達にとっては、愉快なことではないかもしれぬ。反面、快哉を呼ぶ人もかなりいるかと思われる。

結局、人間というものは単純ではなく、人の知らぬ明暗をまとった複雑なものということが判って貰えればよい。もっとも、本多秋五君から小田切秀雄君に至る彼の親しい友人達には、こんなことを申し上げる必要もないが……。

二、私と平野君の戦後の著書との出会い

「井上君、君に、戦争中大変世話になった平野謙ね、あれが或る雑誌に、君の悪口を書いているよ。とんでもない奴だ」と、秦豊吉さんが、後樂園スタジアムの重役会のあと、私に教えてくれたのは、昭和二十八、九年頃だったろう。

秦さんは私の旧制高校の先輩で、『若きウェルテルの悲しみ』の訳者としても有名だし、文学者としての業績も豊かだったが、後年東宝の重役におさまリ、また戦後、後樂園の社外重役でもあった。然し私は、あの平野君が、私の悪口など書く筈がないと思ひ、また書いたとしても取るに足らぬも

のと善意に解釈し、また当時私は田辺宗英社長の知遇に依えて、後樂園の再建大拡充に全情熱を傾けていたから、平野君の書いたものなど、穿鑿する時間もなかった。然しこの時、彼の執筆したという雑誌など調べて、その文章を読んでおけばよかったなと、今にして思う。

それから約二十年の月日が流れた。

或る日、私はいま勤めている財団の近くの湯島の書店で、書棚に平野君の近著を見つけ、手にとって見たら、偶然、彼が戦中奉職していた情報局にふれた文章が目につき、立読みすると、誤りが非常に多く、これは放っておいてはいけないなと思った。

私はまず彼に、エチケツトとして、その戦後の長い努力により、評論家として一つの地歩を占めたことに対する祝辞を述べ、一層の文運を期待する、と手紙を出し、なおそれに添えて、「大仏次郎先輩を偲ぶ」という私の長いエッセイを載せた旧制高校の同窓会誌「向陵」を送ったら（これは意外にも同窓生の間に非常な好評で、私は十数通の手紙を貰った）、彼から「思いがけなくも三十年ぶり以上にてお手紙に接し」と冒頭して、礼状がきた。その中で「目下厄介な仕事にとりかかっていて、仕事の途中は頭を外にむける余裕なく、せめて大仏次郎論だけでも拝読してから御返事を書こうと思っていたが、その暇なく」と丁寧な言葉がづらねてあった。

それから一ヶ月程経って、私は再び彼に手紙を出した。

それには、彼の情報局に関して書いた二、三の文章に大きな誤りがあるので、確実な資料を提供するから一タなごやかに旧交を暖めたい、彼の都合のよい日時にこちらで設営する、と心あたたかに認めておいた。念のためこの手紙はコピーをとり、私の年来の親友・渡辺久二郎君（歌人、大田区教育委



昭和17年 文芸報国講演会（情報局、文報主催）の帰途、須磨の宿にて
右より 佐藤春夫、花房満三郎、平野謙、久米正雄、
辰野九紫の諸氏（筆者撮影）

員、平野君と共に、平林たい子財団理事）に送っておいた。

ところがそれぎり彼からの音信が絶えた。私は彼の「とりかかっている厄介の仕事」というのが、彼の全集の編集であることを知ったから、

全集に収録の際、前記の彼の文章のミスを訂正しておく方が彼にとってもよいだろうという好意をこめた申し出なのに、と残念に思った。渡辺君は「全集は逐月発刊で、平野氏、猛烈に忙しいのか、それとも何か良心の呵責があって、井上さんと会談するのをためらっているのか」という。

そのうちに、彼の全集の最後の第十三巻が出た。

ところが、そこに収載された前記の問題の文章は、私の申し入れにも拘わらず、全く無修正のままであると共に、彼が大東亜戦争を手放しで謳歌した「婦人朝日」（昭和十七年八月号）や、現

代文学（同年三月号）の文章その他が意識的に収録もれになっている。

私はここで、今まで彼に託していた信頼と友情とが二重に音を立てて崩れてゆくを感じた。私の申し出を無視した彼のしたたかさと、その戦争讃美の恥部をかくし通そうとする卑劣さ——これは、私個人の立場から、また昭和文学史の立学から、はっきりさせておかねばいけないのではないか——。

私は、今、隆々とジャーナリズムの主流にのっている彼ではあるが、それ故にこそ、敢てその彼に、「月刊時事」誌上で、厳正な批判を加えなければと思い立った。

その私を必死に押しとどめたのは、前記の渡辺君である。

「井上さんの気持はよく判るが、実は今、平野氏、病気で入院中なんだ。もう半年もすればよくなくて退院の見通しだから、それまで待つてやってくれ。同じ土俵で堂々論戦した方が男らしいし、効果的ではないか」という。それも一理ある。

私は渡辺君の説得に一応従うことにした。

三、平野謙君の突然の死

激しやういがまた醒めやうい私は、そのうち平野のことも念頭から薄らいで、私の財団の仕事に没頭しているうちに、或る日突然、新聞は平野謙の死を大きく報道したのである。

渡辺君は電話をかけてきて「平野さん、病院から時々新聞に原稿なんか出しているから、すごく元気だと思っていたのに……」という。

私はやり切れなかった。だからいわぬことじゃない。

私はふりあげた拳のやり場に困る思いを、旧制高校文芸部の評論家後輩竹内敏雄博士、青江舜二郎、長谷川泉、中村真一郎、福永武彦、村松剛の諸氏、その他、親しい久保田正文、歌人冷水茂太等の諸兄に葉書して、わずかに鬱をやった。

昭和五十五年の暮、旧内閣情報部の幹部達の久しぶりの会合があった。（内閣情報部と情報局とは、後者は前者の発展形態ではなく、その間に大きな断層があり、前者は文化的、柔軟且つ明朗な性格、後者は規模は十倍になったが、統制の府で硬直的、且つ暗く、両者は全く異質の官庁であることを皆見逃している。）席上、初代の情報部長横溝光暉氏（現在国立公文書館顧問、小田急監査役）が八十二歳なのに、『行政道の研究』という大著を近く出されるという御元気で、「あの平野謙という男、戦争中巧みに情報局にもぐりこんでいたらしいが『昭和文学史』という彼の本のなかで『初代内閣情報部長に任命された横溝は、昭和三年に官僚的立場から日本社会主義運動史』という著書をかいた人物』だといっているが、何か筆に毒のある、いやな男だね」といわれた。およそ横溝氏ほど官僚臭味のない、明るく人間性豊かな逸材は珍らしいのに、その人をこのように表現するところに、平野探偵と仇名された彼の調査能力の浅薄性と、いやしい主観のゆがみがある。

その帰途、横溝氏は「私が去年出した『昭和史片鱗』で、今まで混同されていた内閣情報部と情報局の質的差違と機能の格差が、やっと昭和史家の注目するところとなった。井上君も、書くべきことは遠慮せず、早く書いておいた方がいいよ」といわれる。

内閣情報部の機構、官制は、無比の法制通だった横溝氏の知的創造物で、主たる目標を各省の情報宣伝活動の連絡調整に置いているところに、陸海軍、特に陸軍の独走をつよく阻止する狙いがあり、しかもそれが有効に作動した。然るに昭和十五年二月、この優秀な横溝氏は、岡山県知事に敬遠され（形は榮転）その後、一挙に陸海軍内外務省等の出先機関みたいな老犬異質の統制官庁「情報局」に変容した。それは、主として陸軍と内務省の主導による。内閣情報部の官制は実によく出来ていて、この役所を「総理大臣の監理（監督より遙かに強い）に属す」と規定し、総理に強い責任を負わせることにより、逆に情報部は総理に密着して、「行政各部の統一を保持する」という総理の職分を補佐する義務を生じ、従って、情報官は一体となって総理のブレインの役を担った。この小粒強力な内閣情報部が単なる「情報局」に拡大された途端、文字通り「内閣」との直通路線を喪い、総裁すら閣議に出られない大変な地盤沈下——格下げを、陸海軍外各省からのりこんできた部課長達は、ポスト争いに夢中になり、誰も気がつかず、ただ私達内閣情報部時代からの情報官のみが、そのことを肌で感じとっていた。特に私など、こんな格下げの情報局と情報官なら、何も将来を約束された民間のエンジニア、コースを離れてくる意味はなかったと思つた。

序でだからいうが、中島健蔵の如きは、あれほど銜学的なのに、内閣情報部と情報局との前記のような非常な質的差違にまるで無知で、その著書にも到る処で「内閣情報局」などといっている。「情報局」はあっても、「内閣情報局」なんていう役所がないことは、環境庁はあっても、内閣環境庁などという役所がないのと全く同断だ。覚えておき給え（この頃、中島健蔵、まだ健在）。

四、喪家の狗を拾う——平野謙を情報局嘱託に採用願末記

それは大平洋戦争前夜の昭和十六年の三月頃の或る日。

その前年の秋、永田町の首相官邸の日本間の内閣情報部から慌だしく情報局庁舎に指定された帝国劇場に引越してきた十余名の情報官達は、事務をとるようにできてない帝劇の構造を突貫工事で改装して、どうやら格好をつけた第一部から第五部までの各室にそれぞれ分散、私は第五部第三課（後の文芸課）の担当となった。私は、その頃、伊藤述史総裁の横須賀での講演に帯同され、車中で「君には課長になって貰うつもりだよ」といわれ、川面第五部長からも同様の内示があり、そのつもりで私は何回かの情報局機構案で大体固まってきた奏任嘱託、判任嘱託、属官（今のノンキャリアの事務官、然し一番よく働いて、課の運営の基盤をなしている）及び雇員の定員の充員をいそぎ、大体この二月頃までに忙しい面接、銓衡、そして採用をすませていた。

そこへ私を訪れた一人の客があった。

守衛の電話で、私の親しい放送課の水谷報情官（やがて放送課長になる）の添え書のある名刺をもっているという。

まもなく私の前に現われたのは、私より三、四歳若く、少しやせていて、気が弱そうだが品のよい人物だった。

要件はときくと、真剣そのものの眼つきで、「是非情報局の、この課の嘱託に採用して頂きたい」という。私の課が、文化統制の中心であることを知っての切願なのだ。

私は、この人のインテリらしい物腰に、若干好意がもてた。できれば何とか採って上げたいが、既

に囑託その他は充員ずみで、どうしようもない。

「今の処、採用するアキはないが、将来欠員ができたら」と、帰って貰った。この私の断り方がソフトだったせいか、その平野君は、四、五日おいてまたやってきた。物静かだが、存外の粘りがある。然し、私の答えは同じだった。

或る夜、大森の家に遅く帰宅すると（仕事が忙しく毎日夜十時頃の帰宅になるが、この日は十二時近かった）、家内が夜八時頃、平野さんという方を見せて、御主人に就職の件で、特にお願ひにきたというので、もう一時間もすれば帰りますからお上り下さいといったら、玄関の外に立ったまま、ここで結構ですと遠慮して、九時半頃まで待っていたという。

——ああ、家まできたのか。

然し私は、家内から本人のその熱心さと、特に礼儀正しさをきき、若干心が動いたようでもある。

当時私は、十年位前から「短歌と方法」という短歌の結社雑誌を主宰し、役人になってからは毎月九日、主な同人が九人ほど私の家集って、賑やかに選歌、編集をすませてくれた。家内は、今日来た平野という人は、その同人の一人で元左翼（党員？）だったT君に、どこか似たおとなしい人だったという。（私の結社は、左翼も右翼も区別せず、正にリベラルだった。）そして採用してあげたらともあった。（今、三十余年後、この原稿を書きながら、女性の直感は、恐ろしいものだと思う。）

その翌日、役所に出ると、昼頃、親しい前記の水谷情報官から電話がかかってきた。

「ああ、平野君という僕の友人、何度か君の処へお邪魔に行つたらう。何とか囑託にとって貰えないかなあ」

「いい人らしいがね、俺の方、もう囑託、定員一杯にとっちゃったんだ」

「実は八高（旧制）の同窓でね、人物はうけあうよ。それに文学方面にはまあ明るい筈だから、君のよい手助けには成ると思うんだが……。実は彼、今、非常に生活に困っているんだ。僕の課じゃ囑託の定員三人もオーバーしちゃって、弱っているんだ」

「そんな無茶して、よく官房で黙っているなあ」

「うん、今のところ、北支中支との放送業務監理が超多忙だとおっかぶせているんだが……。井上君、平野を、何とか頼むよ」

この親友の切なる口添えは、私の心を動かす不可思議な力があつた。

私は一日沈思の後、翌日午後、人事を握る官房一課長、久山秀雄君のデスクの前に立った。

「それは困る」——久山君は私の囑託定員一人増員の要求を峻拒した。然し、そう突き放されると、私はいつもの癖で急にムキになった。何のためにそんな肩入れをするのか自分でも判らないままに、私は三十分近く久山君の机の前に立ち続けた。

彼の卓上の電話は、頻繁に鳴りひびくので、その度に話は中断するが、私は粘った。私は局内の内務省系の部課長とは妙に肌が合わなかったが、その中で金井元彦課長とこの久山君だけは例外だった。旧制一高同窓というせいもある。特に久山君は私より一年下で、私が寮生活時代、文芸部委員で、剣道部でも稽古掛だったといういわばブリリアントな存在だったことは、彼の脳裡に、おのずから一種他人の判らぬ親近感を刻みこんでいるのを、私は最前から躰で感じていた。とうとう彼は最後に、例の上目づかいで、ニヤリと笑った。

私は改めてその彼に、深々と頭を下げた。

私は自分の課に房ると、放送課の水谷情報官に電話した。

「君の顔を立て、平野君、無理して採ることにしたよ」

「ありがとう、ありがとう」。彼は素直な人で、電話口で声はすませた。

「八高の連中って、存外友情が深いんだなあ」と私がひやかすと、「妙な感心の仕方をするなよ」と、浮き浮きしている。

翌日、平野君が早速私の席へやってきた。

明るい顔をしている。「これから郷里（名古屋の在？）に飛んで帰って、両親を喜ばせて来ます」という。

数日経った日曜の午前、彼が大森の私の家を訪れた。

「家に帰って報告したら、父が一番喜んでくれました。そして、『その課長さん（私をさす。私は總裁から課長にするという内命を去年の夏うけながら、去年の暮、情報局として正式スタートの直前、陸海軍の部課長ポストのバランスから、上田という海軍機関中佐が、私の上に課長として突然着任した。然し、官等俸給とも私の方が上だったので、上田中佐は仕事のおおむねを私に任せていた）に、お前は一生仕える運命をもっているんだ。何故かといえば、お前の本名は平野朗で、その方は井上司朗だから、お前はいつまでも誠実にその人に仕える宿命をもっている』といわれてきました」という。丁度お茶を運んできた家内が、後で「何だか不思議なお話しねえ」と、まだ若かった家内は、くすくす笑っていた。